

1

文学

2

画家

3

お祭り

4

野原

5

病

6

美しい

2

1
A

イ

B

オ

C

ア

2

エ

3

イ

4

ウ

5

おはじき

6

イ

7

(記述題)

8

イ

(9 順不同)

9

ウ

オ

3

1
A

犬

B

水

C

馬

D

足

2

ウ

3

訪ねてきた

4

一方、

5

エ

6

イ

7

生涯

7 完答

った

8
I

2

II

2

III

1

2

7

おばさんと交流した十一歳の夏の思い出だけは、今でもあざやかに思い出すことができるということ。

(同意可)

配点

1・2 1・3 1 各2点×13=26点
2 7 6点
その他 各4点×17=68点
〈計〉100点

1

1 「文学」とは、詩歌や小説、戯曲、随筆、評論などの言語芸術そのものや、それらを研究する学問を指す言葉。特にむずかしいところははないが、「家」の字のバランスや線の本数に気をつけよう。

2 「祭」の字の上部を「然」の上部と混同しないように。

3 「原」の「小」の部分を「水」のように書かないように。「野原」は二字とも訓読みである。

4 基本的な字だが、訓読みまでしっかり理解しておこう。

5 今回は送りがないが、「うつくしい」というふうに送りがなを送ることはしっかり覚えておきたい。

2

1 A「知らん顔」……何も気がつかないふりをしてる様子。B「鳥肌がたつ」……寒さや恐怖のために、毛をむしったあとの鳥の肌のように肌がぼつぼつとしている様子。C「目を細める」……うれしさを表情に表す様子。

2 「あの口の動きほど醜悪なものを私は他に知らない」というのは「気持ち悪い」ということである。それでも見てしまうのは「怖いもの見たさ」が勝っているのである。イについては、「憎悪」するものを見て「笑いだしそう」にはならないだろう。

3 傍線部の七行後にて、「しいちゃんって誰なの」という「私」の問いかけに「姉よ」と「おばさん」が答えている。当然、これは「おばさん」の「姉」ということである。仲良くなった「私」を、ついうっかり親しげに「しいちゃん」と呼んだのは、「おばさん」がこの時、童心にかえり、「しいちゃん」と遊んでいるような錯覚を起こしていたからだろう。そうであるからには、「もうずっと会っていない」今のことはさておき、子供時代は姉である「しいちゃん」とはよく遊んでいたにちがいない。

4 いずれも「朱色」という点と、「おばさんの指」に揉まれていいるという点で共通している。鬼灯の実が「おばさん」に一方的に弄ばれるように、「私」の気持ちも「おばさん」の不可解さによって動揺させられているのである。

5 このあと、「おばさん」は缶をさぐり、「おはじき」を取り出していた。

6 お気に入りのおはじきを除けたあとの缶のなかのおはじきは、「どれを選ばれてもかまわな」いような平凡なものばかりだと思っていたが、「おばさん」に「金魚みたい」と言われた瞬間、そのおはじきがぐつと魅力のあるものかと思えてきたのである。設問3の解説でも触れたような、童心を失わない「おばさん」の魅力的な一面が印象づけられる場面である。

7 一般に「どういうことですか」という設問は、より充実した説明によって傍線部の言葉を置き換えていく作業を求めている。今回は「あの夏の記憶」という指示表現と、「おなじあかるさでそこにある」という比喻表現とについて、くわしく説明をすればよい。「あの夏の記憶」というのは本文の範囲で考えるならば「パン工場のおばさん」と過ごした時間の思い出という理解でよいだろう。一方、それが「いつまでもおなじあかるさでそこにある」という表現は、直前に挙げられた様々な出来事の記憶が「次第にうすくなっていく」という表現との対比を成しており、「いつまでもあざやかに思い出せる」、「今でもありありと覚えている」といった意味のことを述べているものと理解できる。

8 脱文中の「五分間」という文言が重要なヒント。本文中に「あの五分間だけは嫌だった」とあったが、「あの」という指示語が指す対象について、初読時に気にすることができただろうか。おばさんが鬼灯を弄ぶのを見るのは「おもしろかった」が、「ただし、最後の五分間は別」だった、という流れである。

9 設問3、設問6の解説にある通り、アとイは妥当な読み取りである。「おばさん」が怒ったのは、「私」の発言が「おばさん」の抱えている何らかの葛藤にたまたま触れたためと考えられるし、「おばさん」自身も「動揺」しているとあるから、ウは誤り。前書きの情報から「私」の孤独が推察されるし、「おばさん」についても、一人で工場裏庭でお昼を食べたり、姉と長らく交流がなかったりなど、「私」のそうした孤独に通じる側面があるため、エも妥当。オは本文において「私」の軽はずみな発言が「おばさん」を怒らせたことと、「慎重な性格」という選択肢中の記述が矛盾する。

3

1 A「犬に論語」……どんなに有意義な話も、相手によつては説いて聞かせても意味のないこと。B「焼け石に水」……少しの助けや努力ではどうにもならないこと。C「馬の耳に念仏」……「犬に論語」とほぼ同じ意味。D「無駄足を踏む」……わざわざ出向いても何の意味もないこと。

2 「物質」と「精神」とは対義語の関係にある。「物質的快楽」とは主として感覚を喜ばせる楽しみのことである。

3 前の文に「ある日、ディオゲネス老のもとを、若きアレクサンドロス大王が訪ねてきた」とあった。同じ文言なので省略されているのである。

4 随筆文では筆者が逸話の「解釈」を加える場合がある。本文にもアレクサンドロスの内心を筆者が推察している部分があった。5 いわゆる「反語」の技法。ディオゲネスのように生活することは今すぐできる。それを誰も妨げてはいない、と言いたいのだ。6 世界征服をしたのかしなかったのか、休んでいるのかいないのかという点について考える。ディオゲネスは本文の最初に書いてあったとおり、「裸で寝そべって日光浴をして」「休んでいる」のである。その上で、「世界を征服したら、休むことができる」というアレクサンドロス大王の主張を「おかしい」と反論するのは、ディオゲネスが「世界征服」などしていないのに休むことができて以上、大王の理屈はおかしい、ということをやっているのである。

7 直前の「あなたの生涯は無駄だった」という発言をより印象的かつ詩的に言い換えている表現である。

8 I……本文の序盤に「史実としてではなく」とあった。II……これは筆者の意見ではなく、あくまでディオゲネスの言ったことである。III……本文は一見「無駄」な時間を過ごしているディオゲネスと、一見立派な生涯を過ごしているアレクサンドロス大王の生き方を批判的に検討したうえで、明確な結論を出すことは控え、最後にいくつかの問いを提示しつつ結ばれていた。

以上